

発行

名古屋大学大学院 国際開発研究科

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

tel/052-789-4953 fax/052-789-2666

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp>

開発の足元

研究科長 成田 克史

近頃、「ものづくり」という言葉をよく聞く。製造、生産ではなく、「ものづくり」なのである。日本の「ものづくり」の中心地である東海地方にあってこんなことを言う失礼をお許しいただきたいが、この耳触りのよい言葉に私はある種の反感を覚える。「つくる」とはどういうことなのか。詩や音楽は別として、自動車や建物を無から生み出すことはできない。鉄なり材木なり、原料が必要であり、それらを調達するために私たちは山を崩し、木を切り倒している。物作りには必ず破壊が伴う。物を作る意義ばかりを強調し、その陰にある破壊に無頓着な態度が大いに不満なのである。

そんな中、去る5月9日付『朝日新聞』第14版の1面から2面にわたる記事「地球異変 銅山下流 埋まる溪谷」を読んで愕然とした。ある海外企業が採掘を始めたパプアニューギニアの銅山で、二十年間にわたり、年平均9千万トンもの不要な岩石や石の粉末が近くを流れる川に捨てられた結果、溪谷は埋まり、流域の森は枯死し、生息していた魚や獣、鳥たちが姿を消したという。そして、この銅を含む鉱石の最大の輸出先が日本だというのだ。

勤勉は日本では美德である。一所懸命考え、一所懸命働いて、それ自体では使い道のないように見える「ただの石ころ」から優れた製品を仕立て上げるのだから、それに見合う価格で売って大きな利益を得るのは当然のことだという意識が私たちの心の中にあるように思う。この勤勉さゆえに日本はここまで繁栄したと考える人も多かるう。しかし件の銅鉱の価格には、現地の自然を守り、人々の食料を確保するために必要であったはずの経費はもちろん含まれてはいまい。環境保全は現地の企業、現地の行政府が行うべきことであり、日本としては合法的な取引によって銅鉱を買い取っているだけだとでも言うつもりだろうか。

上述の記事の一週間前には、国が定めた厳しい水俣病認定基準から外れる患者に対して鳩山内閣が行う第2の政治決着として、210万円が「救済」として支払われることが報じられている。水俣保健所が被害を確認してから実に54年という時が流れている。

日本は環境汚染に対する責任の認識が甘すぎるのではないか。私たちの豊かな暮らしが環境を犠牲にすることによって成り立っていると考えると、何ともやりきれない気持ちになる。

「ものづくり」によって生じる付加価値が日本を裕福な国にしたことは確かであろう。しかし、それはその価値を生み出すことを可能にする資源を安く仕入れることができる状況があるからこそである。

資源、換言すれば潜在的価値を秘めた原料、さらに誤解を恐れずに比喻を用いるならば、「磨けば光る宝石となる原石」を集約しているのだから、豊かになるのは当たり前と言える。自国の資源が日本に渡り、加工されて高値で売られ、日本が大きな利益をあげるのを、彼らはどんな気持ちで見ているのだろう。記事の2面の写真に写った男たちの鋭い視線が印象に残る。

日本が1975年、第1回先進国首脳会議に参加してから35年の年月が過ぎようとしている。先進国の一員として、日本が発展途上国に対する開発援助を行うのは今や当然であるとはいえ、それを着実に実行していることは高く評価されなければならない。その一方で、先進国の一員と並び称されるまでに日本が発展し、豊かになった過程を、私たちはもう一度謙虚に検証してみるべきではなかろうか。

今日の世界を眺めると、飢え、渇き、病、自然破壊、社会と文化の衰退、暴力など、さまざまな脅威にさらされている国や地域がいまだに数多くあり、それらの問題はますます先鋭化しているように見える。こうした脅威を取り除き、安心して豊かな暮らしを実現するために、私たちはまず私たちの足元を見直す必要があるように思えてならない。



研究プロジェクト紹介

国際開発・協力の中核的学際研究プロジェクト展開
「グローバリゼーションと開発」

国際開発専攻 教授 大坪 滋

科学研究費補助金 基盤A(海外学術)H22-H26

「グローバリゼーションが開発途上国の貧困・格差に及ぼす影響の国際比較研究」

名古屋大学総長裁量研究奨励費 H21-H22

「国際開発・協力の中核的学際研究プロジェクト構築:グローバリゼーションと開発」

科学研究費補助金 基盤B(一般)H18-H21

「グローバリゼーション下の途上国開発戦略の統合研究:国際開発経済学の構築」

今日の開発・国際開発は、経済社会活動のグローバル化というコンテキストを無視して展開することはできない。本研究チーム(研究科教員9-11名参加)は、国際連合国際経済社会問題局、世界銀行国際経済局、日本政府、途上国政府等において開発途上諸国の国際経済への統合準備に関する研究・政策対話を行ってきた大坪滋教授(研究代表者)を中心に、科研Bプロジェクトにおいて国内学際研究を進めてグローバリゼーション下の開発の諸相と課題を洗い出し(『グローバリゼーションと開発』勁草書房2009年2月刊)。

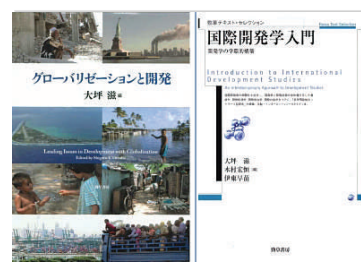
名大総長裁量経費プロジェクトにおいて開発学の学際的構築のシステム化(『国際開発学入門 開発学の学際的構築』勁草書房2009年12月刊)と海外共同研究拠点との研究協力構築(アジア・アフリカ7ヶ国16研究機関)を果たし、科研A(海外学術)プロジェクトにおいて本研究分野初の学際的国際比較研究に着手している。

経済活動のグローバリゼーション下の途上国開発においては、

国内、国家間の格差が運動・重層化しながら拡大していくメカニズムを理解し、対処に努めなければ貧困削減につながる経済成長(Pro-Poor Growth)を達成することはできない。国際貿易理論や国際資本フローの理論

では国際経済統合は先進国側と途上国側に対称的な効果・事象を発生させ、主に途上国の(非熟練)労働者の受益を通じて貧困削減につながることを示唆している。多くの既存実証研究においても経済統合は、成長を「平均的」に加速させ、また「平均的」には分配中立であることから貧困削減に寄与するはずとしている。しかし実際にはこの「平均的」な関係の周囲には諸国横断で見ても、時系列で見ても多くの「ばらつき」が存在し、グローバル経済への統合が成長につながらない諸国や、成長に寄与しても所得分配や産業の空間分布の不平等の増大から貧困削減につながらない諸国が多く出現している。そこで本研究では国際経済への統合が途上国経済社会におよぼす影響(成長、不平等、貧困について)の「国家間のばらつき」とその各国特殊要因(社会経済制度や政策パッケージ等)を探る「国際比較研究」を展開し、グローバリゼーション下の開発戦略への提言と国際経済理論モデルの再検証・再構築を期したい。

参照 http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/sotsubo/Globalization_KakenA_2010-2014.pdf



第二言語習得における処理単位に関する基礎的研究

国際コミュニケーション専攻 教授 杉浦 正利

国際コミュニケーション専攻では、現在、科学研究費補助金による10以上の研究プロジェクトが行われています。今回はそのうちのひとつで専攻として取り組んでいるプロジェクト「第二言語習得における処理単位に関する基礎的研究」を紹介します。

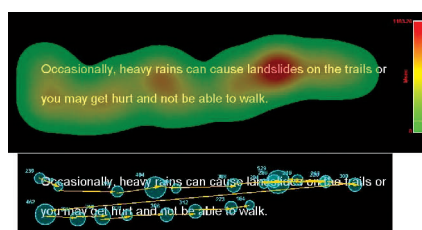
この研究の目的は、第二言語(外国語)の習得において、学習者はどのような単位で産出及び理解を行なっているかを明らかにすることです。

従来の外国語学習においては、言語学における分析単位である「単語」を要素とし、文法規則を適用することで、「文」を産出し、また、理解においては、「文」を「単語」にわけ、それを支配している文法規則に基づき意味を理解するというモデルが考えられてきています。しかし、「単語」を数千語覚え、文法テストでは満点をとるような上級外国語学習者でも、母語話者と同等には「自然に」産出や理解を行なうことはできません。これは、上級になれば「単語」と「文法」の処理(産出および理解)が速くなるということだけでは説明できません。外国語と母語とでは、処理の仕方や処理の単位が違っているのではないかと推測されます。そこで、本研究は、学習者が外国語を処理している「過程」に

おいて、実際にどのような単位で処理を行なっているのかということ、リアルタイムで記録し観察することで、学習者と母語話者との処理単位の違いを明らかにしようとしています。

文を書く過程については、キーボードの入力をミリ秒単位で記録するプログラムを使って書く過程を観察します。文を読む過程については、視線計測装置を使うことで、モニター上に提示された文のどこをどのように見ているかを、これもミリ秒単位で記録・観察します。

この研究により、外国語と母語との処理の違いを明らかにできるのみならず、どのように処理をすることで、より「自然に」外国語を使えるようになるかがわかるのではないかと期待しています。



▲英文読解時のヒートマップ(上)と凝視点の移動(下)



▲視線計測装置(SR Research社 EyeLink1000)

JSPSアジア・アフリカ学術基盤形成事業

国際開発専攻 教授 岡田 亜弥

平成20年度に日本学術振興会(JSPS)「アジア・アフリカ学術基盤形成事業」として国際開発研究科(GSID)が申請した「グローバル化時代のアジアにおける新たなダイナミズムの胎動と産業人材育成」研究交流事業が採択され、現在、3年目を迎えている。本事業の目標は、近年、グローバル化が急速に進展し、中国、インドや東南アジア諸国が急成長を遂げる中で、狭間に位置するメコン川流域圏諸国など後発途上国を中心に、アジア諸国を対象に、アジア大学間ネットワークを通じて、アジアにおける新たなダイナミズム、特にグローバル化および地域統合と国際分業体制の再編がこれらアジア途上国にもたらすインパクトを解明し、これら諸国が貧困削減と持続的成長を達成するための産業育成、および産業開発を推進するために必要な産業人材育成上の課題を研究するとともに、課題解決に向けて産業人材育成のための支援を行うことにある。すなわち、本事業の実施により、研究交流を通じて、アジア後発途上国に開発のための「リサーチ&アクション」拠点を構築することが目標である。具体的には、以下の6つの目標の達成に向けてさまざまな活動を展開している。

(1) 国際共同研究・研究者交流: アジア11カ国の研究者との大規模な学際的国際共同研究を、以下の3つのサブテーマについて実施している。グローバル化と国際分業体制の再編のアジア諸国へのインパクト アジア後発途上国における経済社会構造の変容 グローバル化時代のアジア後発途上国における持続的成長と産業人材育成。

(2) 名古屋大学を中核とする「開発のためのアジア学術ネットワーク(ANDA)」の構築・強化: 平成20年度にアジア11カ国の中核大学を結び、アジア初のアジアの開発のための大学間ネットワークANDAを構築した。このANDAを通じて活発な研究交流を展開している。

(3) 若手研究者の育成・研究能力の向上: ANDA参加大学の若手研究者の研究能力向上のため、上記国際共同研究への参加、ならびにANDA国際セミナーでの研究発表の機会を提供してき

たほか、平成21年度JSPS「若手研究者交流支援事業」の採択を受け、平成22年5月にアジア8カ国のANDA参加大学の若手研究者14名を本研究科に2週間招聘し、「ANDAを通じた国際開発研究の推進と若手研究者能力強化」事業を実施した。

(4) 国際フォーラムやセミナーの開催: 平成21年1月23-25日に、チュラロンコン大学経済学部との共催により、第1回ANDA国際セミナーを開催し(於タイ・バンコック)、ANDAを正式に結成したが、続いて平成22年1月8-10日に、第2回ANDA国際セミナーを開催した(於カンボジア・プノンペン)。本セミナーには、濱口総長をはじめ、本研究科教員14名・大学院生8名を含め、アジア11カ国より90名の研究者が参加し、10の学術セッション、4学生セッションにおいて合計33本の論文が発表され、非常に熱のこもった議論が行われた。

(5) 政策提言: 上記国際共同研究の成果を3巻の英文叢書にまとめる予定であり、こうした研究成果の発信を通じて、アジア後発途上国の開発戦略、特に産業人材育成政策に関する政策提言を行う。

(6) 「開発のためのアジア学術ネットワーク」を活かしたアジア域内の国際貢献・支援: ANDA参加大学と協働し、アジア後発途上国における産業人材育成のための教育プログラム形成など大学間ネットワークを活かした支援を行うことを検討している。



▲ 第2回 ANDA国際セミナー参加者

2010年度 入学状況

1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	54 39 100	15 18 32	11 16 26
国際協力	21 20 40	13 13 25	11 11 20
国際コミュニケーション	32 25 51	14 8 23	12 7 19
合計	107 84 191	42 39 80	34 34 65

注... 赤は女性、青は留学生で内数

2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	7 16 22	4 9 12	4 9 12 3
国際協力	11 12 18	6 5 10	6 4 9 3
国際コミュニケーション	6 11 18	4 6 10	4 6 10 8
合計	24 39 58	14 20 32	14 19 31 14

注... 赤は女性、青は留学生、緑は内部進学者で内数
2009年度10月入学分含む

2009年度 学位授与状況

2009年度に当研究科(GSID)より授与された学位数は以下のとおりです。

課程博士取得者16名。課程博士取得者を専攻別に見ると、国際開発専攻(DID)6名、国際協力専攻(DICOS)3名、国際コミュニケーション専攻(DICOM)7名です。

修士学位取得者は77名。取得者を専攻別に見ると、DIDが26名、DICOSが29名、DICOMが22名です。



博士学位取得者記念撮影(DID)



博士学位取得者記念撮影(DICOS)



博士学位取得者記念撮影(DICOM)

学位取得者のことば

Graduated from DID in 2010 Zenebe Bashaw URAGUCHI

Joining a Ph.D. program requires careful planning. This involves personal commitment, clear and manageable research proposal and budgeting. There might be other important issues, but I think the ability to maneuver these three factors highly influences whether to complete the program on time with measured difficulty. This in turn sets the stage for the next challenge of finding the 'right' job for professional growth and personal satisfaction. I believe that the Ph.D. program in the Graduate School of International Development (GSID), a young and growing educational and research establishment, prepares students to be equipped with the requirements for similar challenge.

Personal commitment is the decision to spend considerable time in the program. It relates to seriously thinking about the tradeoff: what would I sacrifice if I joined the program? Clear and manageable research proposal is the core of the planning. Without such plan at hand, the lyrics in George Harrison's song fit very well: 'If you don't know where you're going, any road will take you there.' Money matters a lot too. Personal expenditure and tuition fees need saving.

The Ph.D. program in the GSID and its faculty members guide and facilitate the above three requirements. They encourage as well as supervise students to show their best personal commitment: completing chapters on time, doing field studies, presenting/publishing academic works, and so on. The program has also generous financial support (scholarships as well as tuition exemption) for students who demonstrate their ability and need.

The fact that I am awarded the Ph.D. degree by itself gives personal satisfaction not only to me, but also to friends, family members and other colleagues in the same league. Yet, I see this as the beginning of another chapter in life. If I am able to use effectively what I have learnt from faculty members, fellow students and people involved during my research project, I think I will be able to follow what my role model former South African President Nelson Rolihlahla Mandela put succinctly as: 'The greatest glory in living lies not in never falling, but in rising every time we fall.'



国際協力専攻 佐藤 久美

GSIDに、前期課程から入学して後期課程を修了するまで、一年間の休学をはさんで八年間在籍いたしました。私は、名古屋市内の大学を卒業以来、結婚し子育てをしながら欧米人スタッフ達とともに英字雑誌の編集・発行をしておりました。中部地域の歴史や伝統、生活などを紹介する雑誌を発行する立場になって、実は自分自身が日本についての知識がないことに気が付きました。

また、1995年1月に発生した阪神・淡路大震災では、当時兵庫県に居住していた多くの外国人住民が困難な状況に置かれていたことを知りました。日本語で出される災害情報や生活情報を理解することが出来ず、災害弱者となっていたのです。大震災発生後に取材で神戸を訪れましたが、避難所となった小学校で老人や子ども達が寒い中で震えながら食糧の配給を待っている姿に衝撃を受けました。日本語の情報提示しかなされていない避難所には自分達は受け入れてくれないと考え、危険の残る自宅に戻っていた外国人もいたことがわかりました。その折に、多言語での情報提供の必要性を強く意識しました。

「学びたい」という思いが強くなり、GSID(国際協力専攻)に入学しました。30カ国以上から来ている外国人留学生達とともに学ぶ環境はとても新鮮で、一気に世界がひろがったようでした。研修旅行ではインドネシアや中国、ラオスなどの学生達と夜更けまで語りあいました。論文が書けなくてくじけそうになったときも、若い留学生達が研究室で熱心に勉強している姿を見て、

私も頑張らなくてはと気を引き締めたものです。

神戸を取材した折の体験を基にして、研究論文のテーマは、「多文化共生」を国の施策として掲げている日本において、多言語での情報提供が必要であることを論じるものいたしました。阪神・淡路大震災の折に外国人にはどのような情報が必要であったのかを調べる傍ら、実際に役立つものを構築するために、情報や地理学を専門にする名古屋大学の教授たちと、防災情報を多言語に翻訳するシステムを開発し、愛知県のウェブサイトに掲載いたしました。その後も、観光情報の多言語翻訳システムの構築(愛知県ウェブサイト)をするなど、多言語での情報発信に務めています。

GSIDの高橋先生や東村先生には、論文執筆にあたって大変貴重なアドバイスやご指導を頂きました。3月に行われた学位授与式では、民族衣装をまとった各国からの留学生や、和服を着た日本人学生たちが、一つの高い山に登りきったようなとても晴れやかな表情をしていました。私もその仲間に加えていただけたことに感動しました。

そうです。「いくつになっても学ぶことは、素敵!」

Learning is fun. Learning makes us expand and broaden our horizons!



新スタッフ紹介

大学院生の時から取り組んでいる「農村開発」研究という縁があって、この4月1日付で、西村美彦先生(現在、琉球大学)の後任として国際開発専攻に着任しました。農業経済学、農業経営学、農業普及学等を拠り所にしなが、バングラデシュ及びインド東北部で農村開発あるいは農村発展の実践的フィールド研究を進めています。

名古屋大学農学部を卒業後、フィリピンでの稲作技術指導における苦い経験を契機に農民の社会経済行動や農村経済に関心に移り、農業経済学を専攻して大学院に入学しました。恩師である指導教員や厳しい先輩院生から「調査」「研究」「教育」の薫陶を受け、農村開発を表看板に農学を裏看板にして助手・講師・助教授・教授の生活を農学部という環境のなかで過ごしてきました。振り返ると、何が理由であるかは分かりませんが、10年程度を仕事の一区切りとしながら、変化と刺激を求めて京都大学と山口大学に奉職し、再び刺激を求めて社会科学系の独立大学院である国際開発研究科に移ってきました。わくわくさせる刺激に圧倒されないように、マイペースを心掛けながら、直に満20歳を迎える名古屋大学国際開発研究科の文化に適應できるのではないかと考えています。国際開発研究科では、国際開発学のプロフェッショナルである先輩教員及び若手教員の方々との交流によ

って、これまで大切に育んできた異分野(地理学、歴史学、生態学)及び周辺分野(作物学、林学、農業土木)の仲間たちとの協働を一層発展できることを期待しています。

自転車あるいは徒歩で職場まで最大3kmという通勤生活(大学宿舍住まい)が長かったため、名古屋大学でも職住一体的な生活、毎日子供と一緒に食事ができる生活を自ずと考えました。しかし、思うような宿舎が見つからず、「名古屋は家賃が高い」と嘆きながら、家内に100%頼って、名古屋大学に近接する坂が多い地に今の賃貸住宅を見つけ出しました。毎朝、大学キャンパス内を木々の緑等を楽しみながら東から西南に横断して、伊勢湾岸自動車道の大橋と名古屋市南部を眺められる8階の研究室に到着します。週末は、購入した年間パスポートで東山動植物園を我が家の附属公園の如く利用したり、子供の食農教育、安心できる運動場と我が家の食料自給のために、私の実家に帰って80歳過ぎの親父から「第二種兼業農家」を継承するための営農修行を受けたり、マイホームパパに励んでいます。



国際開発専攻 教授 宇佐見 晃一

国際協力専攻 准教授 西川 由紀子

2010年4月より国際協力専攻教員として着任しました。専門は平和学で本研究科では平和構築プログラムで平和構築学、紛争の国際政治を担当します。かつて本研究科へ入学し、開発と紛争について研究をはじめて以来十数年ぶりに教員として戻ってきましたが、国際開発に興味を持つ学生が集まる雰囲気は当時と変わっていないように感じました。GSIDに戻るまではしばらく日本を離れ、紛争と平和にかかわる問題について研究をしてきました。ボスニア、東チモール、ケニアにおいて人道支援、和解、小型武器問題などについて調査・研究を、また、本研究科へ赴任までの5年間は、タイの大学院で紛争・開発・平和・人権について研究・講義を行っていました。

もともととくにタイについて研究を行っていたのではなかったこともあり、タイでの5年間は日々の生活面でも大学での講義や大学行政の仕事についても全く違う環境に戸惑うことが多くありました。そのような中で紛争や開発、人権問題が学問上の議論ではなく、毎日の生活や仕事の中で必ず直面することであることを認識し、より現実的にこうした問題を捉えることができるようになったように感じます。

実学が重要であると言われますが、国際開発や国際協力の分野

は学術的な貢献だけでなく実際に起こっているさまざまな問題への対応が求められ、研究に携わる者に対しても具体的な問題解決のための貢献が期待されています。そのためには理論を習得するだけではなくさまざまな分野の専門家や実務家と議論していくこと、現地に赴いて理論では見えない状況や諸条件を認識する必要があります。現実的に問題に対応するには何が必要か、何をしなければならないのかということも含めて今後はGSIDの皆さんとともに試行錯誤していきたくと思っています。

平和学や平和構築はまだまだ新しい分野であることから理論体系への貢献や、安全面に配慮しながら行わなければならない調査や研究手法の発展も必要な分野です。とくに理論発展の中心であった欧米地域以外からの平和や紛争概念についての理解や、それらへの取り組みについての実証研究は既存の理論体系に寄与すると考えられていることからアジアやアフリカを中心に平和・開発・紛争について研究を行い、同分野への学術的貢献と社会貢献ができればと思っています。



国際コミュニケーション専攻 准教授 大島 義和

2010年4月に国際コミュニケーション専攻教員として着任いたしました。専門は理論言語学で、本研究科では意味論・語用論関連の科目と演習を担当します。

上智大学に学部生として在学しているときに、日本語教育に興味を持ったのがきっかけで、言語学の勉強をはじめました。そして、日常的にコミュニケーションの手段として使用される言語の中に、普段は意識にのぼることのない不思議な問題や興味深い性質が隠されていることを知り、より専門的な研究の道に進みたいと思うようになりました。学部卒業後は東京大学の言語情報科学専攻修士課程に進学し、2001年から2006年にかけては米国スタンフォード大学の言語学研究科博士課程に留学しました。

博士課程修了後は、アリゾナ州立大学、茨城大学で(外国語としての)日本語や、日本語学関連の科目を教える機会を得ました。授業を教えるというのは、自分が学生の時分には簡単なことに見えたりもしたのですが、立場が変わってみると難しいと感じたり、思うようにいかなかったりする場面が多くあります。これから教育経験を重ねていくなかで、より納得のできるティーチングができるよう努力していきたいと思っています。

現在の研究テーマについてもお話しますと、談話的叙法性に

関わる表現、より具体的には日本語の終助詞「ヨ」「ネ」、助動詞の表現「ノダ」などの意味機能に興味を持っています。形式意味論的な分析手法と、コーパスを利用したデータの収集・検証を通じて、こういった微妙なニュアンスを持つ表現の理解を深めていきたいと思っています。また、日本語用言(動詞・形容詞)の活用にも関心があります。というのは、日本語の用言に関しては伝統的国語学、外国語としての日本語教育などの立場に基づく、いくつかの異なる「活用表」が通用していますが、現代の一般言語学観点から見てどのような形態論的分析が最も妥当かという点については十分な議論が尽くされていないように思えるからです。

名古屋大学にはまだ来ただけですが、研究科所属の学生からは学業に真摯に取り組む姿勢が感じられ、教育者としての立場から嬉しく、また頼もしく思います。学生たちが、本研究科で充実した知的経験を重ね、優れた人材としてはばたいていくのに出来る限り貢献していきたいと思っています。



国際協力専攻 助教(日本語論文執筆補助・戦略的対応担当) 東江 日出郎

私は、本年度、日本語論文執筆補助、GSIDの戦略的対応担当助教として着任致しました。

着任以前は、GSIDの博士課程(DICOS)で開発と政治・行政を専攻しながら、JICA沖縄国際協力センターでメディア技術指導を行い、琉球大学非常勤講師として東南アジア地域研究などを担当致しました。その間、国際交流基金からの支援を受けて、米国ハワイの東西センターで客員研究員も務めさせて頂きました。また、シンクタンクという地域開発の現場で、奄美群島の地域活性化プロジェクトの調査事業にも従事致しました。不慣れなこ

とも多く、戸惑いながらですが、私のこれまでの経験がGSIDの助教としての業務に役立てられれば、と考えております。どうぞ、宜しくお願い申し上げます。

着任後短い期間ですが、現在まで最も関わらせて頂いた業務は、日本学術振興会の平成20年度「アジア・アフリカ学術基盤形成事業」としてGSIDが申請した「グローバル化時代のアジアにおける新たなダイナミズムの胎動と



産業人材育成」研究交流事業です。事業の一環でアジア諸国から招聘された若手研究者が行った視察やリレーセミナーなどでの裏方や、チラシ、ポスター作成を担当致しました。不慣れなため、ご迷惑をおかけしながらでしたが、最善を尽くして務めさせて頂きました。

私の苗字の「東江(あがりえ)」はかなり珍しい名前とお思いの方もありでしょうが、私の故郷の沖縄県では、割と多い名前です。沖縄では、東は「あがり」で西は「いり」と読みます。日が昇るのが東で沈むのが西と考えれば覚えやすいかと思います。私は高校を卒業するまで沖縄で育ったため、若干のんびりした性格をしていると言われます。その点は私自身が修正しなければいけな

い点だと思っております。

私はフィリピンの開発に関わる政治を研究しております。開発において政治の安定が重要なことは当然ですが、汚職などで予算が無駄に使われないような政治を行うことも重要です。しかし、フィリピンの政治の現実、この「無駄」が非常に多く見られるだけでなく、一部のエリートのみ利害が反映されるような政治が繰り返されてきました。そのような中、無駄を省き、とりわけ貧困層の利害を政治・行政に反映させられる政治家(地方首長)を掘り起こし、その誕生と繁栄、衰退の過程とその条件を、客観的かつ具体的地域の文脈に沿って説明することが私の最大の関心です。

客員研究員の紹介

国内客員研究員

白井 和子(財)国際開発高等教育機構(FASID)事業部・次長代理)

研究課題:開発プロジェクトの管理運営手法研究について

期 間:平成22年6月～平成22年11月

北村 友人(上智大学総合人間科学部教育学科・准教授)

研究課題:東南アジア諸国における高等教育改革の動向に関する研究

期 間:平成22年4月～平成22年9月

西村 美彦(琉球大学観光産業科学部・教授)

研究課題:観光科学の視点からの農村開発研究

期 間:平成22年10月～平成23年3月

中西 久枝(同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科・教授)

研究課題:中東における紛争予防

期 間:平成22年4月～平成22年6月

内藤 耕(東海大学文学部・准教授)

研究課題:インドネシア農村の社会学的研究

期 間:平成22年4月～平成22年6月

倉沢 愛子(慶應義塾大学経済学部・教授)

研究課題:インドネシア社会の開発と社会変容

期 間:平成22年5月～平成22年7月

杉浦 功一(和洋女子大学人間・社会学系・准教授)

研究課題:民主化とガバナンス支援の実態

期 間:平成22年5月～平成22年7月

高村ゆかり(龍谷大学法学部・教授)

研究課題:地球温暖化分野における国境調整措置と

そのWTO協定適合性に関する研究

期 間:平成22年7月～平成22年9月

近藤 敦(名城大学大学院法学研究科・教授)

研究課題:日本の移民政策:欧米諸国との比較

期 間:平成22年10月～平成22年12月

塩原 良和(慶應義塾大学法学部・准教授)

研究課題:多文化主義(多文化共生)と先住民族:日豪比較を中心に

期 間:平成22年10月～平成22年12月

明石 欽司(慶應義塾大学法学部・教授)

研究課題:17・18世紀の欧州国家間関係と国際法理論の展開

期 間:平成22年7月～平成22年9月

馬場今日子(金城学院大学文学部英語英米文化学科・講師)

研究課題:タスクの繰り返しによるライティング発達への影響

期 間:平成22年4月～平成22年6月

蒙 韞(MENG Yun)

研究課題:中国人日本語学習者の語用論的能力の習得について

期 間:平成22年7月～平成22年9月

赤野 一朗(京都外国語大学・教授、英語コーパス学会・会長)

研究課題:現代英語の語彙分析の理論と実践

期 間:平成22年10月～平成22年12月

趙 彦民

研究課題:地域社会における民俗芸能の機能と伝承

期 間:平成23年1月～平成23年3月

外国人客員研究員

王 名(清華大学公共管理学院・教授)

研究課題:中国のNPO発展の課題及び市民社会への動向

期 間:平成22年4月1日～平成22年6月30日

丁 妍(復旦大学高等教育研究所・講師)

研究課題:中国における産業人材育成

期 間:平成22年7月1日～平成22年9月30日

Monzur Hossain(バングラデシュ開発研究所・リサーチフェロー)

研究課題:バングラデシュにおける金融安定性と

知識集約産業の経済発展について

期 間:平成22年10月1日～平成22年12月31日

Saichol Sattayanurak(タイ国チェンマイ大学文学部・准教授)

研究課題:社会的記憶空間における自治と

アイデンティティを思考したエスニック闘争

期 間:平成22年4月1日～平成22年5月31日

Rizal Yond(インドネシア財務省国税局・税務署長)

研究課題:インドネシア税務部における官僚制改革:ジャカルタの例

期 間:平成22年6月2日～平成22年8月31日

戴 龍(中国政法大学国際法学院・副教授)

研究課題:中日独占禁止法における企業結合規制の比較研究

期 間:平成22年10月1日～平成23年2月28日

Nanang Pamuj(ガジャマダ大学・助教授)

研究課題:インドネシアにおける行政改革

期 間:平成22年4月1日～平成22年6月30日

Suharko Sukandar(ガジャマダ大学・助教授)

研究課題:インドネシアにおける地方分権化

期 間:平成22年7月1日～平成22年8月31日

Špica Dragana(株)WAIDO・WAIDO・ベオグラード駐在員)

研究課題:日本語辞書における形容詞記述の精密化

期 間:平成22年9月1日～平成22年12月31日

スタッフの人事異動

教 員

平成22年3月31日 退職

国際開発専攻 准教授 北村 友人
(上智大学総合人間科学部・准教授へ)

国際協力専攻 教授 中西 久枝
(同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科・教授へ)

国際協力専攻 助教 櫻井 次郎
共通 特任助教 阪上 辰也

平成22年4月1日 着任

国際開発専攻 教授 宇佐見晃一(山口大学農学部から)
国際協力専攻 准教授 西川由紀子(Mahidol Universityから)

国際協力専攻 助教 東江日出郎

国際コミュニケーション専攻 准教授 大島 義和
(茨城大学留学生センターから)

協力教員の交代

教育発達講座

旧:伊藤 彰浩 教授(大学院教育発達科学研究科)
新:寺田 盛紀 教授(同上)

比較国際法政システム講座

旧:大屋 雄裕 准教授(大学院法学研究科)
新:森際 康友 教授(同上)

国際文化協力講座

旧:吉田 純 教授(大学院文学研究科)
新:古尾谷知浩 准教授(同上)

事 務

平成22年4月1日 転出

総務課 犬飼 尚樹(総務部人事労務課へ)
江崎 紀行(附属図書館情報管理課へ)

経理課 高崎 寛子(名古屋工業大学へ)
教務課 藤本 康子(文系教務課留学生担当へ)

平成22年4月1日 着任

経理課 苅谷 桃子

平成22年4月1日 転入

総務課 近藤 文子(情報連携統括本部情報推進部情報推進課から)
端場 純子(工学部・工学研究科総務課から)

教務課 箕浦裕満子(国際部国際企画課から)

出版物紹介

2009年度には、『国際開発研究フォーラム』39号が発行されました。
次号40号は2010年内の発行を予定しております。

『国際開発研究フォーラム』掲載論文は、下記URLアドレスより全文閲覧できます(21号以降)。
<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/bpub/research/public/forum/index.html>

お知らせ

名古屋大学大学院国際開発研究科 広報委員会

オープンキャンパス 2010 に関するお知らせ

下記の要領で「オープンキャンパス 2010」を開催します。皆様のご来場をお待ちしております。

日時 平成22年7月10日(土)

会場 名古屋大学大学院 国際開発研究科棟(地下鉄名城線「名古屋大学」下車)
地図はホームページを参照ください。 <http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/global/general/map.html>

内容 プログラム

- | | |
|-----------------------------------|-----------------------------|
| (1) 留学生相談 10:00~12:00 | 入学試験の説明 |
| (2) 施設見学 11:00~13:00 | 院生による特色ある社会貢献活動 |
| 見学できる施設: | GSIDでの学生生活(院生会)公開講座の案内 など |
| 図書室、言語情報処理室(コンピュータールーム) | (6) 専攻別説明会と個別相談 15:00~16:30 |
| (3) 海外実地研修、国内実地研修画像放映 13:00~13:15 | 専攻別説明会(教育プログラムを中心に) |
| (4) 院生によるGSID紹介 13:15~13:45 | 個別相談(教員と院生が対応します) |
| (5) 全体説明会 14:00~14:50 | (7) 展示 11:00~16:30 |
| 専攻及び教育プログラムの特徴 | 海外実地研修、国内実地研修、研究科出版物 など |
| GSIDの入学生の構成、就職先 | |

お問い合わせ先 / opencampus@gsid.nagoya-u.ac.jp